

松下ゼミと地域連携

— 若者たちの笑顔と奮闘 —

松 下 啓 一

1. 地域連携と松下ゼミ

近年、地域連携はある種のブームであり、また多くの大学にとって、大学の生き残り戦略とも関連することから、「地域」とは何か、「連携」とは何か、十分議論されずに、とにかく地域連携が始まっている。

本来、地域は、一定の範囲を持ったまとまったエリアという包括的、総合的な概念なので、そこにはさまざまなものが混在している。それゆえ地域に対しては、ひとつの学問的アプローチだけでは、十分解明ができず、さまざまな学問領域からの総合的アプローチが必要になる。

これが地域連携の担い手としては、大学が最もふさわしいという理由でもあるが、現実には、相模女子大学においても、地域連携に関する明確な統一的な理念をもって取り組んでいるわけではなく、それぞれの教員が、自らの関心、専門領域で、地域連携と考える取り組みを行ってきた。

その流れの中で、松下ゼミも、地域を「地元」と「地方」に置き換え、また連携を「交流」まで広げて理解して、取り組んできた。



2. 行動の松下ゼミ

あらためて、松下ゼミを振り返ってみると、勉強より行動のゼミだったと思う。

松下ゼミが、ひそかにライバル視しているのが、金森ゼミである。社会マネジメント学科のなかでは、「頭の金森ゼミ、行動の松下ゼミ」（金森ゼミ生談）といわれているそうである。

たしかに、松下ゼミは、研究室にとどまることなく、あちこちのまちづくりワークショップに出かけていき、学生たちは、初めて出会う市民の人たちと、楽しく意見交換をする。

大学の役割は、いくつかあるが、相模女子大のような教養大学は、研究者を育てるわけではなく、「市民」を育てる大学である。民主主義とは、自分とは違う価値の存在に気づき、自ら信じる価値をぶつけ合い、止揚していく作業であるが、松下ゼミは、決して勉強が苦手だからではなく、こうしたシチズンシップを育てるのにふさわしいから、街に出るのである。

こんなゼミなので、ゼミ生はみな仲が良く、就職率だって、とても良い。



3. まちづくりフォーラム

松下ゼミは、平成23年から、「地域と市民をつなぐフォーラム」を企画・運営してきた。画期となったのが、東日本大震災だった。学生が大きく変わったと、いまでも、はっきり覚えている。

東日本大震災では、地域や市民から、救援や支援活動が行われたが、他者やまちのことを自分の問題としてとらえ、自分たちは何ができるかを人々が考えた時だと思

う。その気付きを持続し、仕組みや制度としようと考えようと、ゼミ生たちと始めたのが、まちづくりフォーラムである。

平成23年から7回続けたことになるが、いつも多くの地域の人たちが、参加してくれた。

フォーラムの開催、運営などは、学生たちにとっては初めての体験だったと思う。しかし、こうしたことを考え、実践しながらシチズンシップを学ぶのが教養大学である。手づくり感満載のフォーラムであったが、いつもゼミ生たちがやりとげた。

たとえば、毎回ゲストに来ていただくが、その招聘も学生たちがやった。現地を訪ね、顔を合わせ、お願いする。自慢ではないが、私は一度も、招聘には行ったことがない。出番がないのである。



4. 全国のまちづくり支援—焼津市を中心に

全国のまちづくりにも出かけた。長野県上田市、愛知県新城市、静岡県焼津市、神奈川県葉山町、埼玉県白岡市、同戸田市などである。この中でも、何度も出かけ、さまざまな活動を行ったのが、焼津市である。

・魚河岸シャツファッションショー

「魚河岸シャツ」は、焼津市のご当地ファッションである。手拭いを使って仕立てたシンプルなシャツであるが、それに若い人が注目し、カラフルな外出着として作り直した。

その魚河岸シャツを盛り上げようと、ファッションショーに、学生たちもモデルとして参加する。最初は6人だったので、「Sa・Ga・Jyo ! 6」と言われたが、その後は、「Sa・Ga・Jyo ! 26」になった。しかし、残念ながら、「48 !」にはならなかった。

ファッションショーには、サガジョの先生たちも出演した。中西先生は、マスコミから人気の的で、随分落ち着いた学生だといわれた。



・市民まちづくり集会への参加

焼津市市民まちづくり集会は、自治基本条例に基づくもので、市民、行政、議会の三者が集まって、まちの未来を話し合うものである。この会議は、別に何かを決める会議ではなく、みなで大いに語り、まちの未来のための知恵を出し合う会議である。ここに。ゼミ生が参加して、「よそ者・若者」の視点から、まちづくりのヒントを提案した。終わったあとは、みんなで大宴会となった。



・特産品を使った食堂メニューの開発

ゼミ生たちが考案した焼津学食メニューが、カフェテリアで販売されたことがある。焼津市役所の若手職員と相模女子大学とのコラボ企画で、焼津市の特産品である、はんぺんなどを使って、学食メニューをつくった。我がゼミ以外でも12のチームから応募があったらしいが、見事、入選した。



採用されたのが、写真のちゃんぽんである。さっそく、ゼミ生たちと食べに行ったが、とてもおいしかった。

5. 地元・相模原市南区のまちづくり

さまざまな取り組みを行ってきたが、やはり地元、南区との地域連携が、質・量とも突出している。

相模原市南区が抱える課題のひとつが、まちづくりに若者が参加しないことである。区民会議では、その対応策を検討してきているが、それをゼミ生たちが支えてきた。

・地域に出掛け、まちづくりを体験する

「若者が地域活動に参加するための必要な事項」を考えるにあたって、デスクの前に座って考えても本当のことはわからない。「問題は事務室で起こっているわけではない」からである。ゼミ生たちは、地域に出かけて考えた。平成25から27年度まで、19団体に、延べで52名のゼミ生が参加している。



- 若者参画を検証し、多様な意見を聞きながら、課題を乗り越える仕組みや工夫を考える

お祭りから帰ってくると、その検証である。ゼミ生たちと若者と受け入れた地域の人たちとが話し合うワークショップを行った。若者参画がうまくいった要因、うまくいかなかった要因等を煮詰めていくと、若者のまちづくり参加を進めていくためのヒントが浮かび上がってくる。

- 無作為抽出型区民討議会の実施

参加した若者や若者を受け入れた地域の人たちだけで考えると、発想やアイデアも固定しがちである。そのほかの若者や一般区民の意見を聞くことも必要である。そこで、無作為抽出による会議の運営にも協力した。

- 若者参画ルールブックをつくる

こうした出来上がったのが、若者参画ルールブックである。「まちづくりへのトリセツ」という名称の小さな冊子には、ゼミ生たちの奮闘の成果が凝縮している。



まちづくりフォーラム（取り組み）

2011年「大震災シンポジウムーつなぐをキーワードに」

テーマ 「大震災シンポジウム・パネル展示ーつなぐをキーワードに」

出 演 桂直之さん（三陸河北新報社 常務取締役）
穂積亮次さん（新城市長）
鈴木永さん（上田市百勇士会会長）
市橋綾子さん（杉並区議・相模女子大学卒業（食物学科）
松下啓一（コーディネーター・社会マネジメント学科）

2012年「思いをつなぐ、思いをつむぐ」

出 演 【基調講演】「石巻から一市民、ボランティア、そして復興へ」
老舗割烹八幡家の女将・俵街づくりまんぼう取締役 阿部紀代子さん
【パネルディスカッション】「思いをつむぐ、思いをつなぐ」
・阿部紀代子さん
・服部信明さん（茅ヶ崎市長）
・野田祐機さん（助けあいジャパン代表理事）
・竹内亜紀さん（母ちゃんず）
・松下啓一（コーディネーター・社会マネジメント学科）

2013年「寄り添う若者たちー若者が存分に力を発揮する社会へ」

出 演 [パネラー]
・横浜国立大学大学院博士課程 小林由香里さん（海外協力隊の経験者）
・陸上自衛隊座間駐屯地 近藤直樹さん（東日本大震災の支援）
・福島県本宮市真結女御輿会元副会長 河野かおるさん（地域の祭り）
[アドバイザー]
・京丸園社長 鈴木厚志さん（若者、障害者雇用の農業経営）
・小田原市長 加藤憲一さん

2014年「引きこもりを地域の力に」

講 演 菊地まゆみさん（秋田県藤里町社会福祉協議会常務理事）

2015年「認知症・安心して徘徊できるまちづくり」

講 演 汐待律子さん（福岡県大牟田市「はやめ人情ネットワーク」代表世話人）

2016年「自分たちのまちは、自分たちでつくるーきらりよしじまネットワークの取り組みからー」

講 演 高橋由和さん（山形県川西町「きらりよしじまネットワーク」事務局長）

2017年「若者が集まり、その力を存分に発揮するには

出 演 ・愛知県新城市若者議会
・相模原市南区若者プロジェクト
・静岡県焼津市・わかもののみち静岡